

ジョジョと人形使いと 英雄学校

黒三葉サンダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その男はどこか他人とは違つた。

だが男はそれに悩む事はなかつた。

男にとつて他と違う事はどうでも良かつた。

「個性があるからヒーローになれるんじやねえ。無個性だからヒーローになれないん
じやねえ。ヒーローになりてえなら、まずはてめーの魂で魅せてみやがれ！」

これは個性とは違つた能力を持つた男の奇妙な物語であるッ!!

目 次

プロローグ

第一話 新城 丈作という男

第二話 個性？悪霊？……否！その名は

スタンドツ！

第三話 その後

30 17 8 1

プロローグ

とある県のとある町にて、その男はジャケットのポケットに両手を突っ込んで歩いていた。

その男の名前は新城 文作。

義理と人情を重んじる男だが、嫌な事はハツキリNOと言える日本人である。しかしこの男、言いたいこともハツキリと言ってしまう上に口調も荒い為他人からは誤解をうけやすいのだ。

そんな彼にはある秘密が隠されている。

文作が向かうのは人気の無い森の中。木々の合間を縫つて歩いていくとその場所はあつた。

やけに開けたその場所には変に木々が無く、近くにある太い木には何かで殴った痕が残っている。

文作はその木の前に立つとおもむろにその拳を強く握る。

「すう……はあ……オラア！」

すると文作は強く握ったその拳を太い木に叩きつけた！

殴られた木からメキメキと音が鳴るが、丈作はそんなことはお構いなく殴り続ける。

「オラオラオラオラオラオラオラオラア！」

叩き込むこと7回、一撃が重い丈作の拳を7回受けた太い木はバキバキと音を立ててへし折れた。

この男、生身の拳で太い木を殴り倒したのだ！

「……はつ。だいぶいい感じになってきたか？」

丈作は拳を見るが、固い木を殴つたその拳は少し赤くなっているだけで別段問題はないようだ。

「性懲りもなくまたやつてるのね」

次の木に向かおうとする丈作に一人の少女が声をかけた。青いワンピースのようなノースリーブにロングスカート姿の少女の名前はアリス・マーガトロイト。

丈作の友人であり、ご近所さんであり、学友である。

そして彼女にある秘密が隠されている。

「あ？アリスか。何をやろうと俺の勝手だろ」

「そんなのだから友達が少ないので、あなた」

「うるせえ、お前も人の事言えたもんじゃねえだろ」

「あら、私は丈作よりも多いわよ」

そう、丈作には友人が少ない。

と言うよりもアリス以外に友人がいない。

それに比べアリスは友人が多いとは言えないものの、少なくとも丈作ほど酷くは無いのである。

「ちつ。んで、何のようだ」

丈作は余裕の笑みを浮かべて、アリスに舌打ちをすると、自分に不利なこの話題を急遽変えるべく話を反らす。

アリスはその丈作の様子にクスクスと笑うと、丈作の前にズイツとカゴをつき出した。

「あ？」

「あなたまだご飯食べてないでしょ？ 徐庶さんが慌ててたわよ」

「あー……わり。すっかり忘れてた」

「忘れてたじやないわよ。ご飯はしつかり食べなさいって言つてるのに。ほら、早く受け取つてよ」

「へいへい……」

丈作は気の無い返事を返しながらアリスからカゴを受け取り、その場にドカツと座り込んだ。

「こらー！地面に直接座らない！今シート敷くから早く立ちなさい」

「ああもうメンドクセエなあ！お前は俺の母親か！」

丈作はアリスの言葉に噛みつきながらも言われた通り素直に立ちあがり、ズボンのホコリを手で払う。

何だかんだ言いながらもアリスの言葉に従う丈作であつた！

その後手際よくシートを敷き終わると、今度こそ丈作はその上に靴を脱いで座り込んだ。

靴を脱がずに座り込めばアリスにまた何か言われかねないと思つた丈作の行動は正しかつた。

アリスもまた靴を脱いでシートの上にちょこんと座り込むと、丈作に話題を切り出した。

「それで、調子はどうかしら？転生者さん」

「はっ、まあそこそこだな。お前の方こそどうなんだよ、転生者さんよお」

アリスの質問に丈作はカゴからサンドイッチを取り出しながら言葉を返す。

そう！

何を隠そー丈作とアリスの二人は転生者なのであるッ！

尤も、丈作とアリスは自分が転生者である事は把握しているものの生前の記憶は残つ

てはいないのだ。

「そうね、まだ違和感は拭えないけどそこそこと言つたところかしら」「ほん、じやあお互いにまだまだつてことだな」

丈作は鼻で笑うと持つていたサンドイッチに齧り付いた。するとすぐに丈作の動きが止まり、アリスにジト目を送る。

アリスはアリスでそんな丈作の様子を見てしてやつたりとした顔で返すばかりだ。そして丈作の時は動き出した。

「おい、これお前作つたやつだろ。お袋の味とちげえ」

「そんなすぐに分かつちやう?」

「つたりめえだろ。お袋のやつの方がうめえし」

「ちよつと、それは聞捨てならないんだけど——」

「ほらよ」

丈作の言葉に食つて掛かろうとしたアリスの眼前に丈作が拳を突き出すと、札をアリスの前でひらつかせた。

突然の事に一瞬キヨトンとするアリスだが、すぐに我に帰った。

「なに?」

「材料代だ」

「……はあ。だからいらないつて言つてるのに」

「うつせえ。貰えるもんは大人しく貰つとけ」

「はいはい。それじやあ遠慮無く」

こういう時の丈作は頑固になることをアリスは知つているため、目の前のお札を受け取り財布の中へとしまい込んだ。

受けた恩は必ず返す。

それが丈作が大切にしている事の一つである。

アリスは丈作のそんな律儀なところを友人として好ましいと思つている。

因みにこの二人は只の友人同士である。今後どうなるかは二人とも知るよしもない。

「そういえば、丈作は結局雄英高校に行くの？」

「んあ？ああ、まあな。お前はどうすんだよ。天才様は志望校なんて選びたい放題だろ」

丈作はあまり成績が良い訳では無いが、別段悪いわけでもないのだ。つまり勉強すれば何とかなる。

しかしアリスはいわゆる天才に近しい分類により、丈作の言う通り志望校はほぼ選びたい放題である。

「そうね……せつかくだし、丈作と同じ雄英高校にしようかしら」

アリスはニコニコしながら丈作に言葉を返す。

普通の男なら勘違いしそうな場面だが、こと丈作に至つては胡散臭そうな目でアリスを睨んでいた。

「……お前俺が受かる確率を減らす気か」

「あら？ 私一人にすら勝てる自信がないのかしら？」

「あ？ 上等じやねえか。お前を蹴落としてでも受かってやる！」

クスクスと馬鹿にするようにはリスは笑うと、丈作はものの見事にアリスの挑発に乗つてしまふのだつた。

こうしてこの日、丈作はアリスを蹴落としてでも雄英高校に受かる事を誓つた。

↓To be continued!

第一話 新城 丈作という男

新城 丈作はわりと自由人である。

無論学業は疎かにはしておらず、サボリも殆ど無い。

しかし彼の事を知っている人物に彼が眞面目な人間かと問えば、皆口を揃えてこういうだろう。

「それはない」と。

実際丈作は自身の通っている中学の不良達をまとめて叩きのめしていたり、ついうつかり授業中に居眠りしてしまう事等が挙げられる。

しかも彼はその人相の悪さと中学生とは思えぬガタイの良さ、そして不良の一件で教師陣から目をつけられている。

尤も、本人からしてみれば全くもつてどうでも良い事だと思っているのだが。

そんな彼の趣味は物作りや筋トレといったものである。意外と思えるかも知れないが、丈作は手先が器用なのだ。

ただ、彼の場合は他者とは違う部分があつたのだつた。

この日、丈作は母親である徐庶から渡された買い物のメモを持つてスーパーへと向

かつていた。

丈作の家は丈作と徐庶の二人暮らしであるため、母親の負担を少しでも減らすために丈作は自ら買い出しの役を買って出ているのだ。

「うわああああん！」

「あ？」

丈作がメモの内容を見ながら歩いていると、一人の子供が泣きながら道端を歩いているのを丈作は見つけてしまった。大人達もそんな子供の様子を見てはいるが、誰も声を掛けようとはしていない。

彼は無言で泣いている子供の元へと歩いていく。

因みに今の彼の服装は黒いジャケットにジーパン、そして黒いサングラスを着けている。彼のガタイも相まってそつち方面の人にしか見えない。

「ち、ちよつと君！あの子供に何をする気だい！」

「んだよ、別にガキを殴ろうなんざ思ってねえよ。何も出来ねえなら大人しく引っ込んでろや」

近くにいた大人が丈作をひき止めようと勇気を出して声を掛けるが、自分よりも大きな体を持ち余計な威圧感を出している丈作に一睨みされ動けなくなつた。

それを見ていた人達は止めることを止めた。一部の人は警察に電話なんかしている

レベルだ。

「おい坊主、何を泣いてやがる」

「ひつ……」

子供は自分よりも何倍も大きい丈作に声を掛けられてビクッと震える。心なしか丈作が声を掛けたせいか余計に泣きそうになつてゐる気がする。

丈作はそんな子供の様子を見て、頭をボリボリとかきながら出来るだけ子供と同じ視線になるようにしゃがみこむ。

「男がいちいちビビつてんじやねえよ。ほら、なんで泣いてんだ？」

「…………これ…………壊されちゃつた…………」

出来るだけ子供を怖がらせないように口調を柔らかくして聞いてみると、少しだけ怯えながらもおずおずと手に持つていた物を見せてきた。

子供が持つていたのは才モチヤの剣だつた。しかしその剣は根元からまるで折られたようにポツキリと真つ二つになつていたのだ。

「これは坊主のか？壊されたつて、いじめか？」

「…………うん…………」

「はん、いつの世もくだらねえ事する奴は消えねえもんだな。おい坊主、てめーの大事なもんをぶつ壊されて悔しくねえか？」

どうやらオモチャの剣は苛めつ子によつて壊されたようだつた。丈作は壊れたオモチャの剣を見て再び泣きそうになつてゐる子供に問いかけた。

「…………悔しいよ…………でも…………僕は弱いから…………無個性だから…………」

子供はぼろぼろと涙を溢して悔しそうにオモチャを握りしめる。

丈作はそんな子供の様子を見て一つ溜息を溢すと、右手を子供に向かつて伸ばす。

子供は何をされるか分からずキュッと目をつむり、大人達は丈作を止めようと声を掛けようとする。

「だから泣くんじやねえよ。男つてのはそう簡単に涙を見せちゃいけねえんだ」

その伸ばされた手が子供の頭を撫でる。

子供はおそるおそる目を開け、大人達は少し啞然としていた。

「いいか？無個性だからつて弱い理由にはなんねえ。てめーの弱さは鍛えてねえからだ。個性がある奴は確かにつええ奴もいるだろうさ。だけどよ、坊主。てめーがそいつに勝てねえ通りなんざ何処にもねえんだよ」

丈作は「説教臭くなつちまつたな」と苦笑する。

それに反して子供は黙つて丈作の言葉に耳を傾けていた。そして大人達の中に紛れて話を聞いているとある少年もまた黙つて話を聞いていた。

「その剣、俺が直してやるよ」

「ほんと!? オジさん直せるの!?」

「オジさんは余計だ」

「あいたつ!」

丈作の言葉に子供は目を輝かせるが、オジさん呼びが気に触った丈作からチヨツプされた。少し力が込められていたせいか普通の痛みが子供の脳天を襲つた。

「ただし条件がある。それを約束出来るなら直してやる」

「条件……?」

「はつ、無償で直してやる程俺は優しくないんでな。どうする? 怖いなら止めとくか?」

泣き虫坊主

「うー……わかつた! 約束する!」

端からみるとヤバイ場面だ。何も知らない人達からすればどのような無理難題を約束させられるか分かつたものではない。それはその様子を大人達と混じつて見ていた少年も同じだった。

「よし、んじや坊主。もう滅多な事で泣くんじやねえぞ。男ってのは泣けば泣くほど弱くなる生き物なんだよ。俺としてもまた泣かれてたらウザつてえからな」
「うん! 約束する! 僕もう泣かない! 強い男になる!」

「……はつ! 精々血反吐吐いて頑張んだな! ほら、そいつこっちによこせ」

丈作は子供の思わぬ言葉に一瞬キヨトンとするが、すぐに口角を上げて鼻で笑つた。心なしか丈作のその顔には喜色が浮かんでいるようだつた。

丈作は子供からオモチャを引つたくると、ジャケットを脱いでオモチャに被せる。

その姿はまるでマジックを披露するマジシャンのようだ。その証拠に子供はキラキラした目で丈作の手元を見ている。

「なあ坊主。せつかくだからもつとかつけえ剣にしたくねえか？」

「え？ 出来るの！？」

「出来るか出来ねえかは坊主のアイディア次第だな」

「じゃあね！ じゃあね！」

丈作の言葉に子供はニコニコしながらどんな見た目かを楽しそうに挙げていく。丈作は子供のアイディアに相槌を打ちながらも手を動かしている様子はない。

最早子供だけではなく、その様子を見ていた人達が皆こぞつて成り行きを見守つていた。

一体どうなるのか、本当にオモチャは直つてゐるのか、まさか丈作の言う通りオモチヤの形が変わつてゐるのか。

「――こんなの！ どう？」

「へえ、ガキの発想力つてのはすげえもんだな。……因みに、もうこの中で出来上がつて

んだぜ?」

「「え?」」

丈作がゆっくりとジャケットを持ち上げると、その手に握られていたのは直った才モチヤの剣だつた。

しかも姿形はすっかり以前と変わつており、子供のアイデイアがそのまま採用された見た目になつていた。

「わー!! わー!! すごい! オジさんすごい! あいたつ!」

「だからオジさんは余計だつづーの。ほらよ」

「ありがとう!!」

丈作は才モチヤの剣を子供へと手渡すとジャケットを着なおした。子供はその剣を嬉しそうに握りしめていた。

「あ、そいや時間——げつ!」

丈作はふと時間が気になり腕時計を確認すると、すっかり時間を取られていたらしくセールの時間が迫つていた。

「ああくそ! まだ間に合うか!? あばよ坊主!」

丈作は子供に適当に声を掛けてその場を走り去つていつた。大人達はポカーンとした顔で、子供は笑顔で手を振りながら走り去つていく丈作を見送つていた。

——その後、丈作がスーパーにたどり着いた頃には既にセールは終了していた。
彼はセールに間に合わなかつたのだ。

「……はあ。仕方ねえか」

「あら、遅かつたじやない」

露骨に溜息を吐きながらセール品以外を買い揃えようとしたとき、後ろから聞き慣れた声が聞こえ丈作は歩き出そうとした足を止めて振りかえる。
そこにいたのは買い物カゴを持つたアリスだつた。

「ちつ、アリスか……」

「ちよつと。今の舌打ちは何よ」

「別になんでもねえよ」

「へー、てつきりセールに間に合わなくて必要な物が手に入らなかつたから落ち込んでると思つてたんだけど?」

「お前俺にケンカ売つてんだろう? 買うぞこら!」

「別に良いわよ? 女子供を殴れない人が私を殴れるならね?」

「……ちつ。さつさとあつち行けや」

丈作は犬を追い払うかのようシツシツと手で払うが、アリスはニヤリと笑い返す。
そしてそれを丈作へとちらつかせる。

その手に持っているのはセールの戦利品であつた。

「これ、余分に取つちゃつたのよね。あんまり多く持つても仕方ないし、出遅れた丈作
にでもあげようかと思つてたんだけどなあ」

「ぐつ……」

「どうしようつかなー、他の人にお裾分けしよつかなー？」

「……何が望みだ……」

結局丈作はプライドよりも母親の笑顔を取るのだつた。

それに対してもアリスはニコニコとしているだけだつた。

後日、丈作はアリスと一緒に出掛ける事を約束されてしまつた。

↓ To be continued!

第二話 個性？悪靈？……否！その名はスタンドツ！

個性。

それは現在のヒーロー社会において必須となる程の特殊能力である。

彼等ヒーローは己の個性を理解し、鍛え、助けを求める人々の為に奔走する。人々にとつてその姿は正しくヒーローなのだ。

しかしその反面、その強大な力に酔いしれて犯罪に走つてしまふ輩も多いのだ。

無論初めから惡意を持つて犯罪に走る輩だつて沢山いる。殺害、強盗、器物破損、窃盜、公務営業妨害、挙げていけばキリがない。

そんな犯罪者達を捕まえるのも彼等ヒーローの大切な役目なのだ。

そう、全くもつてヒーローという仕事は死ぬほど忙しいのである。

例えばそう！今待ち合わせ場所で丈作がボーッと家電屋のテレビを眺めているその画面にいる人物！

まるでアメコミのヒーローのようなコスチュームで身を包み、高笑いしながら倒壊していただビルを救助者を担いで乗り越えてくる筋肉質の男！

『H A H A H A ! もう大丈夫！私が来たつ！』

このヒーロー社会において知らない者はいないと言える程の存在であり、平和の象徴と言われているN.O. 1ヒーロー!

オールマイトであるツ!

丈作が密かに社畜戦士と呼んでいるこの人物はヒーローを目指す人々にとつて目標であり、憧れなのだ!

ヒーローの卵達はオールマイトのようなヒーローに、オールマイトを越えるヒーローになろうと奮闘するのだ!

「ふああ……おっせえなあ、あいつ」

……しかしテレビ画面を眺めながら欠伸をする丈作にとつてオールマイトは然程気になる存在ではないらしい。

しかしそれも仕方ない。この男、ヒーローを目指してはいるものの特に尊敬しているヒーローはいないのである。厳密に言えば尊敬している人物はいるが、その人物はヒーローではなかつたという事だけだ。

尤も、丈作にとつてその人物はヒーローと言えるかも知れない。

「ねえ……あの人かつこ良くない?」

「やつぱり? 私けつこう好みかも」

「声かけちゃう?」

遠巻きに丈作を見ていた女子学生がヒソヒソと話している中、丈作は自分の事が話されていることなど梅雨ほど知らず腕時計で時間を確認しテレビに視線を移す。

「ねえ——」

「お待たせ。けつこう待たせちゃったかしら?」

女子学生が丈作に声を掛けようとしたその時、丈作に声をかける少女がいた。アリスである。

まるで見計らつたかのようになじみの女子学生が声を掛けるタイミングで被せてきた辺りに何か作為を感じなくもないが、丈作にはそんなことはどうでもよかつた。

「おせえよ。30分くらい待つたぞ」

「約束した時間よりも早いわ。それは丈作の自業自得ね」

「このアマ……」

この男、不機嫌そうにしていても待ち合わせの時間よりも早く待機していたのである。

それは一重にアリスを待たせない為の配慮ではあるのだが、アリスはそれを理解した上で丈作をおちよくつているのだ。

「でも嬉しいわ。ありがとう」

「……ちつ、さっさと行くぞ」

アリスは自分よりも早く待ち合わせ場所で待つてくれていた丈作にお礼を言うと、丈作は舌打ちしながらも歩きだす。アリスはクスクスと笑うと、丈作の後を追つた。

因みに、二人のやり取りを見ていた女子学生達はあの二人の間には入れないと悟りすぐす」と帰つていった。

歩き馴れた商店街を丈作とアリスが並びながら歩く。

二人の身長差は30cm程離れており歩幅も大きく違うのだが、丈作はアリスの歩幅に合わせて歩いている為に並んで歩けている。無論アリスもそれに気付いているが、からかうような事は考えていない。

「で、今回は何の荷物持ちだ」

「え?一緒に遊びましょつて誘いだつたのだけど?」

「……」

「いや、別に熱は無いからね?」

普段は荷物持ちをさせてくる筈のアリスの言葉に丈作は信じられないと一瞬唖然となるが、アリスのおでこに手を当てて熱が無いかを確認する。アリスは突然丈作の手がおでこに当たられた事に赤くなりながらも手を振り払う。

「じゃあ何で顔赤いんだよ」

「べ、別になんでもないわよ！ほら、そんなことより遊び倒しましょ？」

「……つたく、具合が悪くなつたら我慢せざつさと言ふんだな」

「はいはい、その時はすぐに言うわ」

すると二人は何事も無かつたかのよう再び歩きだした。

繰り返し言うが、この二人は付き合つておらず互いを友人同士にしか思つていないのである！

このやり取りを見た男性陣は丈作に嫉妬の視線を浴びせ、女性陣はアリスに羨望の眼差しを送っていた。

尤も、二人ともその視線には気付いていなかつたが。

「くそっ！まさか負けるとは！」

「ふふん♪こう見えてゲームは出来る方なのよ♪」

ゲーセンのレースゲームにて熱いデッドヒートを繰り広げた丈作とアリスだつたが、僅か数秒の差でアリスの勝利で終わつたのだ。丈作としては自信のあるゲームだつただけにまさかあまりゲーセンに行かないアリスに負けるとは微塵も思つていなかつたのである。

この後も格ゲーやらシューイングやらで戦うも、丈作の負け越しで終わってしまうのだった。

丈作に勝ててルンルン気分のアリスとは違い、丈作は負け越して少し不機嫌になるものの自分が弱かつただけだと言い聞かせて不満を飲み込んでいた。

「ん、もうこんな時間か。意外と居座つしまったな……おい、飯食いに——つて何やつてんだお前」

「ま、待つて。もうちょっとで——ああ！」

丈作が時間を確認しアリスに食事に行こうと声を掛けようとする、そこではクレーンゲームでヌイグルミを取ろうとしていたアリスの姿があつた。
しかし上手くいかなかつたのか、クレーンは掴みかけていた黒猫のヌイグルミを落としてしまつた。その光景を見てアリスは明らかに落胆する。

丈作の目にはアリスが耳と尻尾を垂れ下げてしまふぼりしているように見えた。

「はあ、お前あんだけ俺の事降しておいてクレーンゲームだけはポンコツなのか」

「うー……苦手なものは仕方ないじやない……。行きましょ、お腹空いちやつたわ」

「……ちつ、少し待つてろポンコツ」

「ちよつと！ポンコツは酷いんじやないの！」

丈作は囁み付いてくるアリスを適当にあしらうと、100円硬貨を投入しクレーンを

動かし始める。

アリスはすぐに黙りこんで、固唾を飲んで丈作のクレーン操作を見守っていた。

「……」

「あつ……！」

ある程度目星をつけていたのか、丈作は一切の迷いなくクレーンを動かすとアームが先程の黒猫のヌイグルミをガツシリと掴む。そのままグワングワンと揺れ落ちそうになるものの、ヌイグルミは最後まで落ちることなく穴まで運ばれていき無事にゲットすることが出来た。

それをハラハラと見守っていたアリスは途中落ちそうになるヌイグルミを見て声を溢していたが、無事に穴に落ちると小さく拳を握りこんで喜んでいた。

「ほらよ」

「えつ？ いいの？」

「いらねえならお袋辺りにぶん投げとく」

「……ううん、欲しい」

「あつそ」

「えつ？ いいの？」

丈作はぶつきらぼうに答えると、ジーツと黒猫のヌイグルミを見ていたアリスの顔に

ヌイグルミを押し付ける。

アリスは「わっし」と声を上げながらもヌイグルミをしつかりと受け取ると、ギュッと胸にヌイグルミを抱きしめた。

「……ありがとう、丈作」

「んなこたあいいから、さつさと飯食いに行くぞ」

「うん!」

丈作は少しバツが悪そうに頭を搔きながらズンズンと歩いていき、アリスはヌイグルミを抱きながらもちよこちよこと丈作の後ろをついていくのだった。

昼食を終え、ウインドウショッピングを楽しんでいたアリスと丈作。アリスは未だに嬉しそうにヌイグルミを抱いており、相當欲しかったのだと分かる。

「そんなに嬉しいもんかねえ。それこそヌイグルミとかならお前作れるじやねえか」

「分かつてないわね丈作。このヌイグルミだから嬉しいのよ」

「?」

アリスの言葉の意味がよく分からないのか丈作は首を傾げるが、アリスはただ嬉しそうにニコニコしていただけであった。

丈作にとつて女心は理解出来るものではなかつたのである。

最後に買い物をして帰ろうと二人は馴染みのスーパーに向かっていると、突如商店街

の真ん中で大爆発が起きる！

「なんだ今のは爆発は?!」

「分からぬわ！商店街の中心からよ！」

二人は急いで中心に向かうと、そこでは泥のような何かに捕らわれて藻掻いている少年がいた。

その爆発はどうやら捕らわれている少年の個性のようだ。度重なる爆発で周りの店が燃えて壊れてしまっていた。

「なにあれ……ヴィランよね……」

「ちつ！引き剥がそうと躍起になつて個性使つちまつてゐるせいで辺りが焼け野原じやあねえか！」

ヘドロ・ヴィランの周囲には複数のヒーローがいるものの、人質のせいで攻めあぐねているようだ。

「えれえ力！こりや大当たりだぜ！」

「クソがああっ!!」

再び連鎖爆発が起き、戦況は刻一刻とヒーロー側に不利になつていく！

誰も手が出せない中、民衆の中から一人の少年が飛び出してヘドロ・ヴィランの元へと走つていく！

「待て!止まりなさい!」

「奴に近付くな!死ぬぞ!」

ヒーローの制止も聞かず、少年はヘドロ・ヴィランに向かつて背負つていたカバンを投げつけると中身のノートがヘドロ・ヴィランの目玉にぶつかり、攻撃を掻い潜つた!

その後少年は必死に人質を捕らえていたヘドロを両手で引き剥がし始めた。

「かっちゃん!!」

「デク!!なんでテメエが!!」

「足が勝手に!!なんでって……分かんないけど!!」

デクと呼ばれた少年は己の恐怖を押し殺して笑う。まるで安心させるように。

「君が助けを求める顔してた……!!」

「つ!!」

デクと呼ばれた少年の言葉を聞き、丈作の頭にとある記憶が蘇つた!

それは己の能力に目覚めていなかつた時、まだひ弱だつた彼を救つてくれた男の言葉

『お前さんが助けを求めていた。だから助けてやる』

丈作の恩人にして、唯一ヒーローとして尊敬する名も知らぬ男の言葉!

その男の姿とデクと呼ばれた少年の姿が丈作には重なつて見えた。

だからこそ、この男は動き出すのだッ！

「アリス、ここで待つてろ。すぐに終わらせてくる」

「つ……分かつたわ、行つてらっしゃい！」

ヘドロ・ヴィランが腕を振り上げて少年を吹き飛ばそうと振り下ろす！

「つ！オラア！」

しかしそれよりも速く丈作は二人の間に滑り込み、その腕に向かつて鍛え上げた拳を打ち放つ！

その一撃でヘドロ・ヴィランの振り下ろした腕が弾けとんだのだ！

「なんだお前は!?たつた一撃で俺の腕をつ!?」

「あ、あなたはこの前の……」

「俺が誰かなんててめーには知る必要はねえ。てめーが知る必要があるのはたつた一つ。無様に地面に倒れ伏すつづー事だけだ！」

「何を言つてやがる!!」

ヘドロ・ヴィランは再び腕を横屈ぎに振るうが、何故かその腕は丈作に届く事はなく何もない空間で止まっている。いくら振り抜こうとしても押しきれず、ヘドロ・ヴィランはどんどん混乱していく。

「な、なんだ!?なんなんだお前はよお!?」

「てめーを裁くのは、俺のスタンドだッ!! グレイト・リクリエイターズ!!」

丈作が何か名前を呼ぶと、丈作の体から幽霊のような何かが出現する!

その姿は人型であり、全身に絹のような布が巻き付けられている。そして布から見えるその目には強い光が灯っている。

「はっ! 何をするかと思えば、ただ叫んだだけ—— 「オラア!!」 ぶげえ!?」

ヘドロ・ヴィランは目に見えぬ何かに殴られ、人質から離れて飛ばされる。その姿に最早ヘドロはなく、ただの男性となつたヘドロ・ヴィランが信じられないと言つた顔で己の体を見ていた。

「俺の体が!? 俺のヘドロがああ!?」

「てめーの個性を作り替えた。今のでてめーは無個性の一般人つてことだ。これでマトモに拳が打ち込めるぜ」

そう! 丈作のスタンドであるグレイト・リクリエイターズは触れた物の在り方を変えられる能力を持つているのだ!

つまりヘドロ・ヴィランはグレイト・リクリエイターズに殴られた瞬間、ヘドロという個性が無個性へと作り替えられたのであるツ!

「こ、個性を作り替える個性だとお……馬鹿な! そんな個性があるわけが!」「歯あ食いしばれよ! 俺の拳は中に響くからよお!」

「ひつ！ひいいい！」

立ち上がりつて逃げ出そうとしたヴィランの腕を引っ張り、グレイト・リクリエイター
ズが拳を握りこむ！

そしてヴィランへと叩き込むツ！

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラアツ！」

「うぼぶげぶべえ?!」

おおよそ10発の拳がヴィランへと叩き込まれ、ヴィランは声を上げながら思いきり
吹き飛ばされた！

その威力を相殺出来なかつたヴィランはそのまま地面に倒れ伏して気絶したのだつ
た。

「はつ、やれやれだな」

「か、確保ー！」

それを見て呆気に取られていたヒーロー達だが、すぐに我に返つてヴィランの確
保へと向かつたのだつた。

↓ To be continued!

第三話 その後

丈作がヘドロ・ヴィランを倒した後、丈作は少年と共にヒーローの御叱りを受けていた。

ヒーローでもない彼らがヴィランと戦うのは非常に危険であり、個性の無断使用は法に引っ掛けてしまうのだ。

尤も、この二人は無個性である為に後者の心配は無い。
しかし一番問題だつたのは丈作である。

彼は無個性ではあるものの、確かに個性とは違う何かが、つまりスタンンドがある。
だがスタンンドは同じスタンンド使いにしか見えないのである。だからヘドロ・ヴィランと丈作の戦いを見ていた人達は何が起こっていたのかさっぱり分かつてはいない。

彼らが分かつてているのは丈作が一撃でヘドロ・ヴィランの腕を殴り飛ばした事と、丈作にはパワー系の個性があるという事だけである。

まあ丈作は正真正銘無個性なのだが、彼等ヒーローには今は知るよしはない。

因みにアリスはスタンンドについては丈作から話を聞いており、その能力や丈作が無個性であることも知っているためスタンンドについては信じている。

「だから俺に個性はないつづーの」

「信じられるか！じゃあなんであのヴィランは姿が変わっている！それに君がヘドロ・ヴィランの腕を殴り飛ばしたのを我々は見ていたんだ！無個性であんな事が出来るか！」

「無個性は無個性なりに体鍛え上げてんだよ。個性が無いからってヴィランが倒せねえなんて決めつけんじやあねえぜ」

「それじやあ君が言つていたスタンドとはなんだ？それが君の個性じやないのか！」

「ありや個性なんかじやあねえよ。個性なんかと比べんじやねえ。もういいよな？こつちはまだ晩飯の買い物してねえし、連れも待つてんだ。あばよ」

「あ、待ちなさい！」

ヒーローが丈作の腕を掴もうとした瞬間、その手が何者かによつて弾かれた。しかしヒーローの目には丈作以外何も写つておらず、丈作は何事もなかつたかのように歩き去つていつた。

「おい、大丈夫か？」

「なんなんだ……腕が弾かれた……？」

「皆！大変だ！ヘドロ・ヴィランの姿が戻つていくぞ！」

「なんだと!?すぐに袋に積めてやれ!!」

丈作が現場から離るとアリスが小走りで駆け寄つていく。丈作がヒーローに説教されている時からずつと民衆に紛れてタイミングを見計らつていたのだ。

「おかえり丈作。ケガは？」

「ねえよ。それよりもさつさと食材調達しねえとな」

「ふふ、そうね。でもその前に一回自宅に寄つて良いかしら? この子を持ったままだと買い物出来ないし」

「あいよ」

二人は一度アリスの自宅に寄り、アリスは自室に黒猫のヌイグルミを置くとダイニングからエコバッグを持って丈作と合流する。

「お待たせ。行きましょ?」

「ああ」

丈作とアリスはスーパーへと向かう道中、ずっと無言で並んで歩いていた。

丈作は少し考え方を、アリスはチラチラと横目で丈作の様子を伺つていたのである。

「……さつきから何をチラチラと見てやがる」

「言つたの？ スタンドのこと」

「少しだけな。まあ連中に分かる筈はねえから問題ねえだろ」

「そう。丈作が良いなら気にしないわ。それで、能力の方はどうだつたの？」

「ああ、やっぱ全然だ。あれなら数分もすれば元に戻るだろうよ」

そう、実はグレイト・リクリエイターズで作り替えた個性は一定時間経つと元に戻るのである。

本人曰く、目に見える物を作り替えるのは簡単だが見えないものは作り替えるのが難しいらしい。

しかし丈作がそれを理解しているのなら作り替える事が出来る。故にヘドロという個性を理解した丈作がヴィランを殴ることによつて、自分が理解している無個性へと作り替える事が出来たのである。ただし制限時間付きではあるが。

因みに、物体を作り替えた際は制限時間は無い。

「やっぱりスタンドって大変なのね。その分強力みたいだけど」

「否定はしねえ。なんでこんなもんが俺にあるのかも分からねえが、使えるもんなら使わせてもらうさ」

「人助けの為に？」

アリスの問いに丈作は少しアリスを睨み付けるが、アリスは可愛らしく小首を傾げて

丈作を見上げているだけである。

丈作はブイツと前を向いてしまう。

「……手の届く範囲のな」

「? なんて言つたの?」

「何でもねえよ。おら、さつさと歩け」

「あ、ちよつと! 歩幅違うんだからスピード落としてよ!」

唐突に歩くスピードを上げた丈作に、アリスは慌てて小走りで丈作の後ろをついていくのだった。

同時刻。

丈作と同じ無個性の少年がN.O. 1ヒーローから個性を受け継いでいた事を、その少年が丈作に憧れを抱いた事をまだ誰も知らない。

そして丈作の戦いを見ていたヒーロー達が丈作に目をつけたことも、丈作の知るよしはない。

↓ To be continued!